

地域と学校の関わり合いを推進する校長のリーダーシップ  
—生涯学習の保証を中心に—

小 出 禎 子

愛知東邦大学

# 地域と学校の関わり合いを推進する校長のリーダーシップ —生涯学習の保証を中心に—

小 出 禎 子

## 目次

- はじめに
- 1. 生涯学習の課題
- 2. 研究方法
- 3. 事例の概要
- 4. 地域と学校の密接な関わり合い
- 5. 豊かな人生をおくるための生涯学習の保証
- 6. 生涯学習を保証する取り組みにおける校長の役割  
おわりに

## はじめに

本研究の目的は、国民の一人一人が豊かな人生を送ることができるよう、地域と学校の関わり合いを推進することで学校教育の充実を図りながら、地域住民の生涯学習の機会を充実させた事例から、校長の働きや役割を明らかにすることである。

生涯学習の理念は、教育基本法第3条にあるように、「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。」と規定されており、生涯学習社会の構築を目指した理念であると言われている<sup>1</sup>。

もともと生涯学習は、ユネスコが提唱した概念の一つである。ポール・ラングランによる報告書により初めて「生涯教育」が提示され、日本でもその概念が広まった。日本では、高度成長期を経て、技術革新の急速な進展、社会の複雑化、平均寿命の伸張などにより生涯にわたる学習とその高度化が必要となってきたのである<sup>2</sup>。

政策においては、1971（昭和46）年に社会教育審議会が「人間として主体的に、かつ豊かに生き、お互いの連帯感を高めることを求めている」とし、社会教育に自己学習と相互教育の意欲を組織的に高め、その機会等を提供することを期待していると述べられている。続いて中央教育審議会答申「学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」では、生涯教育の観点から全教育体系を総合的に整備することを指摘した。そして、1981（昭和56）年中央教育審議会答申「生涯教育について」では、生涯教育の観点から、家庭教育、学校教育及び社会教育の各分野

を横断して教育を総合的にとらえ、教育諸機能全般にわたった提案がなされた。その後、1986（昭和61）年と翌年の臨時教育審議会第2次答申と第3次答申で「生涯学習体系への移行」が提唱され、その考え方と生涯学習体制の整備の具体的な方策が出された。この中で、生涯にわたる学習として、学習者の視点に立った立場から「生涯学習」という用語を用いるとしている。これ以降、「生涯学習」が一般的に用いられることが多くなったと言われている<sup>3</sup>。

「生涯学習」に関しては、「生涯教育」「社会教育」「生涯学習」の用語の違いが不明確であるという指摘や政策への批判などさまざまな意見がある<sup>4</sup>。

## 1. 生涯学習の課題

生涯学習の課題は、3つの領域に分類できる。1つ目は「生存確定課題」で、自らの生命を維持するための課題である。健康づくりや安全確保などで安全、防災、福祉、環境、人権、平和が含まれる。2つ目は「生活向上課題」で、職業能力の向上など、生きる上でさまざまな問題解決や目標達成をめざすものが含まれる。3つ目が、「生きがい課題」である。自己実現や生きがいや楽しみ、喜びを感じたり、精神的な豊かさを感じたりするもので、自己探求、自己表現、文化・芸術活動、スポーツ・レクリエーション活動、趣味・娯楽活動などが含まれる。生きて生活する上で必要な課題（「生存確定課題」と「生活向上課題」）の学習の実現という土台の上に、生活の潤いとしての学習（「生きがい課題」）が展開されていくことが一般的と考えられている<sup>5</sup>。

一方、1992（平成4）年の生涯学習審議会答申では、ボランティア活動そのものが、自己開発、自己実現につながる生涯学習となるという視点が示され、学習者が学んだことを他者にボランティア活動として取り組むことは、新たな喜びであり、生きがいや励みになるものであると述べられている<sup>6</sup>。すなわち、ボランティア活動は、「生活の潤いとしての生涯学習」（「生きがい課題」）に含まれるものであり、より豊かな人生をおくるための発展的な活動ととらえることができる。

以上のことから、本研究では、生涯学習を人々が自発的意思に基づいて、自ら学ぶ内容を選び、豊かな人生をおくるために、生涯にわたって行う学習のこととする。そして、その学習は学校教育、家庭教育、社会教育、文化活動、スポーツ活動、レクリエーション活動、ボランティア活動、趣味娯楽など様々な場や機会において行われるものとする。

## 2. 研究方法

実践事例における地域と学校の関わり合いを推進する取り組みを、生涯学習の視点から整理するために生涯学習課題の3つの領域「生存確定課題」「生活向上課題」「生きがい課題」に分け、さらに活動ごとに内容を示す。

次に、校長が新たに取り組んだボランティア活動の組織化について述べる。そして、地域と学校との関わり合いを推進する取り組みにおいて、生涯学習の機会を充実させた校長の果たした役割について考察する。対象とする取り組みは、校長が事例校区の学校に在任していた2010年から

2012年度のものとする。

調査は、2011～2016年にかけて学校訪問や校長への聴き取り調査を中心に行った。また、学校運営協議会にも出席し、地域住民への聴き取り調査も実施した。入手した学校運営協議会や校内研修の資料、学校だよりも分析資料とした。

### 3. 事例の概要

#### (1) 事例地区の概要

事例地区のある町は、県内でも過疎・高齢化が進む地域にあり、温暖な気候を生かして柑橘栽培が盛んに行われている。その町の中山間地に位置している事例地区は、自然豊かな土地で、古くから米作が行われており、現在も米作中心の農林水産業が主幹産業となっている。2005年度国税調査によると、地区の人口は908人、世帯数455、高齢者率は46.4%（町の人口は9,903人、世帯数は4,101世帯、高齢者率は31.4%）であった。少子高齢化と人口減少が著しく、地域活性化が大きな課題となっている。この課題意識は、早くから地区住民に持たれており、特に農林水産業において、農産物の無人販売など集落ごとの取り組みが始められていた。しかし、近年、個別の取り組みから地区全体で地域活性化に向けた活動を行う必要があるという意識が高まり、現在は、地区活性化プランを策定し、それに沿って具体的な取り組みを実施している。

この地区には、小学校と中学校の併設校の学園がある。へき地指定を受けている小規模校で、2012年度末の小学校は児童25名、教職員10名（育休1名を含む）、中学校は生徒数10名、教職員9名、小中学校兼務の校長1名であった。2003年に学園が設立されたのだが、これは中学校の統廃合問題が起これ、学校の廃校により地域が廃れるという強い危機感を抱いた親・地域住民が団結し、署名運動が展開されたことによる。この経験を通して、地区住民は地区全体で地域活性化に取り組む重要性を認識することとなった<sup>7</sup>。

#### (2) 地域と学校を熟知している校長

校長は、学園設立時に中学校の教務主任であったことから、学園のこれまでの経緯や地域住民の学校に対する思い、当時保護者であった地域住民を熟知している。そのため、校長は地域の要望に応えるべく課題を把握しており、その課題解決に必要な情報や人材が地域のどこに存在しているのかも把握している。再度学園に赴任した校長は、学園設立時点よりも少子化が急速に進行しており、教育理念を実現することが困難になること、さらには学校の存続問題にまで発展することに危機感を覚えた。そこで、校長は学校教育の現状とともに、危機的な地域の状況を地域住民に伝え、地域と学校の関係性を深める取り組みを推進していった。

#### (3) 地域と学校との関わり合いの特徴

地域と学校との関わり合いの特徴は、1つ目に「基本理念」を土台にしていることにある。この「基本理念」は、中学校の統廃合問題を契機に、住民運動から小中併設の学園が開校されることが決定された時に、学校・家庭・地域が議論を重ねて制定したものである。したがって、「基本理念」はこの地域の共有ビジョンと言える。「基本理念」には、地域住民が教育の担い手であ

ることが明記され、「地域の活性化に寄与する活動と施設開放」が掲げられている。これは、子どものためとして学校教育の向上を目指しつつも、学校教育の向上がひいては地域の活性化につながるという意識が地域には強いからである。「魅力ある学校をつくることで地域活性化の起爆剤とする」という強い思いから学園建設の住民運動やコミュニティ・スクールの指定を受けていることから理解できる。「基本理念」は校舎にも反映されており、子どもが利用する学校教育の機能と地域住民が利用する生涯学習の場としての機能が備えられたものとなった。近年、「地域活性化の拠点として学校を活用した地域づくり」<sup>8</sup>や学校を地域活性化の拠点とする「地域とともにある学校づくり」の先進的な事例が報告されてきている。ところが、この地区は早い段階から地域活性化を目指した学校づくりに取り組んでいる。早くからこうした取り組みが可能となったのは、地域住民の共有ビジョンとしての「基本理念」の存在が大きい。

2つ目の特徴は、新たな取り組みを始める時は、学校、家庭、地域が同じテーブルにつき、議論を重ねてから行うという民主的な点である。学園開設時には、段階的に学校、家庭、地域の代表者による会議を開き、建物の設計から「基本理念」、教育内容、地域住民の生涯学習に関する議論がなされた。コミュニティ・スクールとなった現在は、学校運営協議会の場で学校、家庭、地域の代表者が学校経営や地域課題に関して意見を述べあっている姿が見られる<sup>9</sup>。

#### 4. 地域と学校の密接な関わり合い

「基本理念」には「地域の活性化に寄与する活動と施設開放」「住民が集い、学べる場として施設設備を開放することにより、学校を起点とした新たな人の輪や流れを形成し、地域の文化拠点としての役割を担う」とある。この理念を実現するため、学校施設は地域住民の生涯学習の施設として利用されており、また、さまざまな地域と学校の関わり合いを推進する取り組みがなされている。その取り組みの概要と新たに展開された取り組みを示す。

##### (1) 地域と学校との関わり合いを推進する取り組み

地域と学校との関わり合いを推進する取り組みを3つの生涯学習の課題活動に分け、表1に示す。「地域住民が講師として子どもの学習活動を援助する活動が、同時に自分の学習になるという側面を持っている」<sup>10</sup>ことから、講師として総合的な学習の時間や学校行事に参加する地域住民にとっては、学校教育への参加も生涯学習の機会となる。このような活動は多数あるため、ここでは一部を示すこととし、地域住民が主体の学習機会を主に取り上げている。

表1 地域と学校との関わり合いを推進する取り組み

生涯学習活動の種類		活動内容		
生活の必要としての生涯学習	安全と防災	スクールガード	校区の子どもたちの登下校及び地域における生活の安全確保を目的とし、各団体及び個人の賛同者が協力して活動を行う。地域で生活する子どもたちに大人が声をかけ、日常的な会話を通じて交流することにより、子どもたちの健やかな成長を支援していく。敬老会、育成会、PTA、学園から代表者会が結成されている。	
	環境	PTAクリーン大作戦	PTA、保育所、役員、地域住民らが、学園周辺、プール、保育所周辺の掃除や整備を行う。人数減少のため、区長会など他の地域組織にも参加が拡大している。	
	人権・平和	菖蒲づくり	生徒が菖蒲を育て、菖蒲の花をかけはしにして、生徒と地域住民が絵葉書や俳句づくりで交流し、人権について学ぶ。	
		リハビリ診療所との交流会	子どもとリハビリ診療所利用者がクイズやゲーム、クリスマス用の寄せ植えを行い交流する。	
		障害者支援施設との交流会	子どもと障害者支援施設の利用者が卒業式・入学式の会場を飾る花の苗を育てる作業を合同で行い、交流を深める。地域住民が特別非常勤講師として指導する。	
		人権講演会	子どもの人権意識向上の事業であるが、子どもからお年寄りまで一緒に人権トーク&ライブを鑑賞し、人権を学ぶ。	
生活向上課題	職業能力の向上	米づくり	総合的な学習の時間に地域アドバイザーによる指導で中学生実行委員が中心となって、土づくりから収穫物の販売、収入の用途まで決め、作業を行い、地域の主要な農産物である米づくりの学習をする。合同文化祭で米の販売をすることもある。地域農業グループの協力もある。地域からは地域おこしにつながっているものと評価されている。	
		土づくり研修会	県職員を講師として、地域の農業グループ主催の「田んぼや畑の“やさしい”土づくり研究会」が開催される。そこに中学生が米づくりのために参加し、土づくりの基本を学ぶ。	
生活の潤いとしての生涯学習	生きがい課題	文化・芸術活動 文化伝統行事活動	音楽会	学校内の地域ホール(体育館)や多目的ホールで、幅広い年齢層の地域住民と子どもと一緒にプロの演奏を聴く。地域の農業グループが主催する「収穫の喜びを感じる音楽会」という、プロと地域の大正琴グループによる演奏会もある。
		合同文化祭	保育園や学校の子ども、地域住民の作品展や舞台発表を行う。地域コーナーには、地域の特産品や物品の販売、自主防災組織連絡協議会による防災物品の展示、獣害対策ブースなどがあり、地域課題も知ることができる。	
		もちまき	神社の地域行事に学校が参加する。子どもが参加することで地域が盛り上がり嬉しいとの声があがっている。	
		茶道体験	学習指導要領に対応した「日本の伝統や文化を学び、地域の方と触れ合って様々な力を身に付けること」をねらいとする「茶道」体験学習で、地域住民が講師として指導する。	
		干し柿づくり	“文化”として根付かせるという地域住民(コーディネーター部会)からの意見をもとに、干し柿作りを地域住民が講師となって新たに取り組んでいる。	
	スポーツ・レクリエーション活動	合同運動会	地域と学校が競技、一体となった運動会が開催されている。多数の地域住民が参加できるよう、巡回バスが運行されている。開催に先立ち、委員会が運動会の運営方法や地域と学校にとってよりよい今後の在り方、地域活性化につながるような在り方を協議している。	
		地域Cup	スポーツを通じて地域の人々の交流を図ることを目的とし、幅広い年齢層の地域住民と子どもと一緒にソフトテニスとグランドゴルフを対戦、応援する。卓球も加わる。育成会、敬老会、学園のテニス部が中心に開催している。	
		夕涼み会	子どもによる歌と踊りの披露、夜店、ゲーム、花火を楽しみながら地域住民、特に高齢者との交流を図り、「基本理念」である学校は地域の文化の拠点となることを実現している。育成会や保育所保護者会が主催する。	
		もちつき大会	保育園、障害者園と学校が合同で、地域住民が講師となっている。もちつきや昔の遊びを体験し、交流する。	
		グランドゴルフ	高齢者のグランドゴルフクラブが学園の運動場で行われている。	
	趣味・娯楽	手芸サークル	学校のコミュニティルームで週1回の編み物中心の手芸を行っている地域のサークル活動である。その後メンバーが特別非常勤講師として家庭科での指導を行うようになった。	
		母親部研修会	エコクラフトの講師を迎え、作品を作成し、合同文化祭に出展する。	
	ボランティア活動	学習支援	地域住民がアドバイザーや特別非常勤講師として授業への支援、総合的な学習の時間への支援、学校行事への支援をする。まずは、運動会や文化祭などの行事への支援を積極的に行い、住民が少しでも関わりやすい体制を作ろうという提案があり、グラウンド周りの草刈りをする。	
		読書指導支援	朝読書の時間に地域住民や保護者が子どもに読み聞かせ活動をしている。講師を迎えて読み聞かせのための勉強会も行っている。また、地域住民が利用する図書コーナー「地域の図書館」の運営支援をする。	
安心・安全支援		学校内外での子どもの安心・安全の見守り支援、校内活動の見守り、登下校の見守り、スクールガードとの協力・連携により朝の街頭指導を行う。		

## (2) 新たな取り組みの展開

学校と地域の関係を密接にする取り組みは多岐に渡っており、学校施設を利用する活動を始め、子どもと地域住民がともに体験する活動が特に多い。同じ場で同じ体験をすることに意味があり、その体験が学校と地域の交流を深めるものとなっている。しかし、こうした取り組みの機会が多数あるにも関わらず、地域住民からは「学校へは行きづらい」との声や、協力する人が固定化されているなどの課題があがっていた。学校側にも、子どもの人数が激減する中、教育の質を維持するためには、地域とともに児童数を増やす取り組みを推進する必要性が出てきた。そこで、校長はボランティアグループの組織化を学校運営協議会に提案した。ボランティア組織は、学習支援、安心・安全支援、読書指導支援の3つグループを設け、それを取りまとめる中心的な役割を果たすコーディネータ部会とともに学校運営協議会の下部に位置づけられている。学習支援ボランティアグループは、これまで行ってきた授業や総合的な学習の時間、行事への指導や支援を行う。住民の得意な分野で学校の「地域人材バンク」に登録してもらい、活躍できる場を設けるもので、固定化された人以外の地域住民が学校へ行きやすいものとなった。安心・安全支援グループは、従来からあるスクールガードの活動を活性化する目的で、できる人ができる時にできることをするという活動となった。読書指導支援グループは、新たに子どもの読書指導を行うもので、今ある地域の読み聞かせボランティアグループの活動を継続し、より発展させることを目的とし、活動を定例化した。また、学校内に地域の図書コーナーを設け、「地域の図書館」として運営する支援も活動に加えられた。この「地域の図書館」は、地域の主要産業である農業関係の実用書や一般図書を学校に配架することで、地域住民が本を読むという生涯学習を促進するとともに、本を借りるために学校に気楽に出入りできることもねらいとしている。コーディネータ部会は、各グループ活動の連絡や調整、メンバーとの仲介、グループ間の情報交換、学校運営協議会とボランティア組織とのパイプ役の役割を持つ。また、学校の魅力や特色を地域にアピールし、積極的な働きかけを行い、学校を身近に感じてもらうことを活動のねらいとしている。干し柿づくりは、このコーディネータ部会で議論され、伝統文化を根づかせる目的で地域住民が講師となって新たに取り組んだ活動である<sup>11</sup>。

## 5. 豊かな人生をおくるための生涯学習の保証

この事例では、地域と学校の関わり合いを深める活動が多様に展開されていた。その活動は、生涯学習の機会にもなっており、生活の必要としての生涯学習から生活の潤いとしての生涯学習まで多彩なものであった。この地域では地域と学校が交流する機会を通して地域住民が学習する機会が多様に設定されていると言える。そして、学習の中でも生活の潤いとしての生涯学習の機会が多く、生きがいや楽しみ、喜びを感じることができ活動が多いことも明らかとなった。例えば、文化・芸術活動では音楽会や合同文化祭が、スポーツ・レクリエーション活動では「合同運動会」や「地域Cup」がある。子どもから高齢者までさまざまな年齢層が交流し、活動を楽しんでいるようすが、「学校だより」で報告されている<sup>12</sup>。特に、新しい取り組みであるボランテ

ィア活動は、地域住民にとって新たな喜びや生きがいや励みになる可能性があり、より豊かな人生をおくるための生涯学習の機会を保証したものとなっている。

## 6. 生涯学習を保証する取り組みにおける校長の役割

このような生涯学習を保証する取り組みが充実しているのは、校長のリーダーシップによるところが大きい。ボランティア活動の組織化を例に校長の働きを示す。

校長は、少子化により教育の質の低下と学校の存続の危機の可能性を学校運営協議会に提示することから始めている。まずは、多くの地域住民に学校の現状を知ってもらうことが必要で、そのためには、学校と地域との交流や地域住民の中での交流の機会を増やすことだと考えているからである。これまでも学校と地域との交流をうながす取り組みをすすめてきたが、より広く地域住民が学校と関わり合いが持てるよう、ボランティア活動の組織化を提案した。この時、校長はボランティア活動の組織化は「学校の活性化、魅力ある学校づくりが地域の活性化に向けた取り組みである」という「基本理念」に基づいていることを強調している。また、地域や地域住民を熟知しているため、組織化にあたり、地域の誰をどこに配置し、何の役割を持たせるのかといったことを適切に判断している。

この校長の働きから校長の果たした役割を明らかにする。まず、将来を予測することで、いち早く地域の課題を明らかにする役割を果たしている。次に、多くの地域住民にこの課題を知らせるために、学校運営協議会を活用している。学校運営協議会には、地域の代表者が出席しており、地域代表者から情報が地域へと発信されることを知っているからである。したがって、校長は情報発信の役割を果たしている。そして、提案する取り組みは、「基本理念」に基づいた取り組みであり、地域住民が納得するものとなっている。また、取り組みの必要性を説明する時には必ず、この「基本理念」に基づいていることをアピールし、地域住民に納得してもらうツールとして「基本理念」を活用している。これが可能となるのは、校長が「基本理念」が制定された経緯をよく知っており、地域の要望を十分に理解しているからである。地域住民のニーズの理解者であり、そのニーズに応えるための取り組みをデザインする役割も果たしている。そして、地域における人と人、人と情報、人と資源を結びつける地域全体のコーディネータ役でもある。

### おわりに

校長は、学校教育の充実を図るねらいから地域と学校の関わり合いを推進していた。校長が新たに取り組んだボランティア活動の組織化は、生涯学習の視点から見ると、生活の潤いとしての生涯学習、すなわち人々がより豊かな人生をおくるための生涯学習の機会を保証した取り組みであった。

その生涯学習の機会を保証する取り組みで校長が果たした役割は、いち早く地域課題を明らかにすること、その課題を地域に情報発信すること、地域のニーズを十分理解し、地域全体の生涯学習をデザインすること、人・情報・資源をコーディネートすることであった。



あくまで校長の第一義的な目的は、子どもの教育の充実であり、学校教育の充実を図ることである。それは同時に地域住民がつくった「基本理念」を実現することである。これらを実現することが結果的に、地域の生涯学習の保証につながるものとなっている。

- 
- <sup>1</sup> 生涯学習の意義については、「平成18年度文部科学白書」（2006年）（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpab200601/002/001/003.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200601/002/001/003.htm)、2016.10.1）などを参照のこと。
  - <sup>2</sup> 生涯学習の政策動向などについては、河野和枝「日本の生涯学習政策の動向と課題－国民の新たな『学び』に注目して－」（『北星学園大学社会福祉学部北星論集』第51号、2014年、103-115ページ）が詳しい。
  - <sup>3</sup> 日本の生涯教育への取り組みについては、文部科学省『学制百二十年史』（ぎょうせい、1992年）が詳しい。
  - <sup>4</sup> 山田一隆『『社会教育』『生涯学習』の概念整理と『まちづくり』への社会教育的接近－『生涯学習政策』下の社会教育の現代的理念の検討に向けて－』（『政策科学』第10巻第1号、2002年、143-160ページ）や津野田亨「生涯学習時代における子どもの“学び”の本質に関する一考－5W1Hの視点を－」（『生涯学習教育研究センター研究報告』第8巻、2000年、47-62ページ）などを参照のこと。
  - <sup>5</sup> 佐々木英和「生涯学習実践の学習課題に関する理論的考察－A. H. マズローの欲求理論の批判的継承を軸として－」（『生涯学習・社会教育学研究』第20号、1996年）などを参照のこと。
  - <sup>6</sup> 生涯学習審議会「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について（答申）」（1992年）（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_gakushu\\_index/toushin/1315169.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_gakushu_index/toushin/1315169.htm)、2016.10.1）。
  - <sup>7</sup> 事例の詳細については、小出禎子『『地域とともにある学校づくり』による地域活性化を促進させるキーパーソンのあり方－コミュニティ・スクールの事例から－』（『大学・学校づくり研究』第8号、2016年、17-30ページ）を参照のこと。
  - <sup>8</sup> 総務省の「学校を拠点とした地域づくりに関する研究会」での議論を通じてとりまとめられた報告書『地域活性化の拠点として学校を活用した地域づくり事例調査 平成25年2月』（総務省地域力創造グループ地域自立応援課、2013年）（[http://www.soumu.go.jp/main\\_content/000222444.pdf](http://www.soumu.go.jp/main_content/000222444.pdf)、2016.10.1）や研究代表者尾寄春樹「『地域とともにある学校』の推進に向けた教育行政の在り方に関する調査研究〈報告書〉」（平成25～26年度プロジェクト研究報告書、2015年）（[https://www.nier.go.jp/05\\_kenkyu\\_seika/pdf/seika/h26/1-2\\_all.pdf](https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf/seika/h26/1-2_all.pdf)、2016.10.1）などで報告されている。
  - <sup>9</sup> 学校運営協議会のようすは、「学校だより」（2012年3月23日号）などで紹介されている。
  - <sup>10</sup> 稲生勁吾『学習ボランティア活動』（実務教育出版、1987年）。
  - <sup>11</sup> ボランティア活動の組織化の経緯やねらいについては、学校運営協議会に提出された資料や「学校だより」（2012年9月26日号）などで説明されている。
  - <sup>12</sup> 行事のようすは、「学校だより」（2011年1月26日号や2012年10月11日号）など多数に写真とともに紹介されている。

受理日 平成28年10月3日